別紙様式３

平成 22 年度　博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

訪問リハビリテーションに従事する作業療法士のアプローチに関する研究
―リフレクションのプロセスを通じた実践内容の振り返り―

学位の種類：　修士（作業療法学）
人間健康科学研究科　博士前期課程 人間健康科学専攻　作業療法科学域
学修番号：０９８９６６０８
氏　名：藤嶋　圭子
（指導教員名：大嶋　伸雄教授）

キーワード：作業療法士、訪問リハビリテーション、質的研究、リフレクション

【研究目的】訪問リハビリテーション（以下「訪問リハ」と記載）に従事する作業療法士は増加しているが、経験することの無かった疾患を持つ対象者や複合的で領域横断的な課題に取り組むことになる。文献も少なくそこから訪問リハに従事する作業療法士の現状について把握することは難しい。本研究では首都圏で訪問リハに従事する作業療法士の作業療法アプローチの傾向把握とその実施にあたって生じる問題点や今後の課題を明らかにすることを目的とした。
【研究方法】対象：首都圏で訪問リハに従事する作業療法士 11 名。作業療法士経験 5 年以上、訪問リハの経験年数 1 年以上が条件。方法：1. 首都圏で訪問リハに従事する作業療法士に被験者（以下「研究協力者」と記載）募集の書面を送付し協力を依頼。2. 研究協力者指定の日時と場所に訪問、印象に残った 3 症例についてリフレクションプロセスに沿った質問をし、IC レコーダーで録音。所要時間は 60 分程度。3. 逐語録を作成、質的帰納法により各プロセスに合わせてセンテンスを分類、カテゴリーを生成。4. 研究協力者が言及したカテゴリー数をカウント、レーダーチャート作成。リフレクション：Gibbs のリフレクションプロセスは、Stage1：記述・描写、Stage2：感情、Stage3：評価、Stage4：分析、Stage5：結論、Stage6：行動計画とした。本研究は首都大学東京研究安全倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：21 首都大荒管 1364 号）。
【結果及び考察】研究協力者：11 名。作業療法士経験年数平均 8.3 年、訪問リハ経験年数平均 3.0 年。リフレクションした内容を分析した結果、記述・描写、感情、評価のプロセスで症例に対する評価が詳細で対応に必要な知識や技術を積極的に習得していること、分析、結論、行動計画の内容が減少することが明らかになった。また作業療法士単独での解決が難しい問題があることも明らかになった。それは進行性難病への対応、症例や家族の意向や経済的問題による介入の難しさ、支援チーム内の協業や医療機関やデイサービスとの連携であった。これらは作業療法士のモチベーションへの影響も懸念された。反面現在改善または悪化の変化に対して介入している症例、失敗による教訓を得た症例や興味関心のある分野については積極的な取り組みが見られモチベーションも高かった。まだ発展途上にある訪問リハの分野では、医学的な領域を超えた知識や技術もより求められている。